

《題名》「自分」が共に生きる社会を生きるということ

《氏名》中川 結理

《大学名》立命館大学

人生には思いもよらない難題に出くわすことがあるものだ。ひとたび出会ってしまえばそれからずっと頭の片隅にこびりついて離れない厄介なもの。私がそれに出会ったのは今から約二年前の大学一年生の時であった。

それは約二年前、大学一回生の私がフィリピンへ行った時のことだった。当時の私はボランティアサークルに入り、日々活動に奮闘していた。元々ボランティアに強い思いがあったわけではない。ただ「世界を知りたい」という気持ちが私を突き動かしていた。自分には知らない世界に住み、そこで苦しんでいる人がいるのなら何かをしたい、その一心だった。そうして現地へ行った時のことである。ある初老のフィリピン人男性から太平洋戦争にまつわる話を聞く機会があった。その男性のお父さんは太平洋戦争中に日本軍人から厳しい拷問を受けていたというお話であった。日本人の年配の方から戦争にまつわる話を聞く機会はそれまでも何度となく経験してきたが、異国の人からまた実際に日本人によって深い傷を負った人の話を聞くのは初めてで、なかなか言葉を返すことができなかった。さらにその人は締めくくり「私は今を生きるあなたたちに恨みがあるわけではないんです。ただ『日本人として生まれたこと』つまりそれは日本の歴史を無視することはできないという大きな意味を持っていることをあなたは忘れてはいけないよ」と述べた。私は人に何かを与えたいという気持ちで日本を離れたが、結果的に日本に帰り着く頃には何か新しいそして重大な課題を背負って帰ってくることとなったのだった。「日本人として生まれた自分」、これを追求せずして他人を救おうというのはあまりにも厚顔無恥であった。

それから二年間、私はサークルでの活動を継続する傍らで二つの「学び」に力を入れてきた。一つは「歴史」を知ること。当時は人々の目に晒されることが不可能であった文献にも、今の私たちには目にすることができる。自由に学ぶ権利が保障されている。彼が私に与えてくれたきっかけは次々に自分自身の中に知的欲求を芽生えさせ、このような当たり前の幸福に改めて気づくことにまで至った。そしてもう一つは「語学」の習得である。フィリピン人の男性の話を聞いた時は通訳を介してであったが、一人でも多くの生の声を自分の力で聞きたいと思ったのがきっかけであった。世界には多くの人がかいて異なる背景を抱えており、それがさまざまな問題を引き起こしている現実がある。二年前の私は「思いやる気持ち」こそが他者との和解やわだかまりをなくすものだと思っていた。しかし今の私ならそれが詭弁であったとわかる。人と人はなかなか分かり合えないからこそ、互いの背景を知る努力をしなければならぬし、コミュニケーションをとるための方法を習得しなければならない。それらが揃って初めて「思いやる気持ち」が作用するのではないかと気付くことができた。私は現在ニュージーランドの地で言語力向上のために日々奮闘しているが、この経験は言語力だけではなく、他にも多くのことを私自身にもたらしてくれている。国も世代も超えて世界や自国について会話をすることは自分の考え方に新たな視点を取り入れることができるからだ。

グローバル社会の名のもとに人々は簡単に関りを持てるようになった。しかしその便利さが人の感覚をより鈍感にしているのも事実だ。人々が「共に生きる社会」を作るためには互いに直接顔を合わせ、話すといった関りが大切だということを私は経験から学んだ。新たな発見の歓喜も衝撃も失望も人と人と

の触れ合いなくして起こらない。そのために私は一人でも多くの人が自分のコミュニティを超えて、「自分」と「他者」を見つめる手助けをしていきたい。そして未だ答えを出せずにいる「日本人として生まれた自分とは何か」という難題に一生をかけて取り組んでいきたいと思う。(1578字)